

# 地域と子どもに必要な不易流行の考え方



大崎市議会議員 小玉 仁志

先日、訪問したせんだい杜の子ども劇場。私が高校生の時以来でしたので、齋藤代表理事とは20年ぶりですが、あまり久しぶりという感覚がなかったのはどうしてでしょうか。最近ではネット・SNS等の情報発信が頻繁であるかと思いますが、違ったステージでも共通のテーマで社会課題に向き合っている二人の会話内容の合点は近いところにあり、すぐに議論が成立していたことも理由の一つだったのだと思います。オンラインでコミュニケーションする機会が市民権を得てきた中、対面でのやり取りに心のキャッチボールが存在していて、次の行動へのスピード感に通じているのだということを確認できた再会でありました。

さて、子ども劇場と私の関係性について少し触れたいと思います。母に連れられ様々な舞台を観劇していた小学生の一人でした。そのうち観劇するだけではなく何らかの会議にも同行し、顔馴染みの大人が会議する傍らで時間を潰していたこともありました。当初は大した意味もわからずついでに行った子ども劇場の活動でしたが、次第に参加頻度も低下しだした高校生あたりでしたでしょうか、「地元商店街の空き店舗を活用して夏祭りのイベントを開催してみないか?」と声かけを頂き、とても面白そうだと思いました。すぐ参加すると返事したのは良いのですが、与え役割はイベントの実行委員長そのものでした。企画、プレゼン、仲間集め、広報、実施等々。子どもたちで構成される実行委員会で企画し、実施に必要な関係機関とのやりとりや予算に関することは子ども劇場や地域の大人がカバーしてくれました。私は子どもと大人の間だったので、その仕組みを目の当たりにできました。振り返れば、大人が地域の子供たちに街づくり事業の一端を任せ、地域社会と関わる機会を提供してくれたものと思います。子どもたちを信頼し、大人の事情やバイアスをかけず、伸び伸びとした環境でその機会を与えてくれました。その結果、公募と声かけで20名ほどの中高生が主体となり、空き店舗の連なる商店街に何千名もの祭りの参加者が集い、その一画に賑

わいをもたらしました。その経験は仲間達と共に大きな達成感を得られ、同時に初めてまちづくりに関わったと感じることのできた経験でした。

当時、私を含む地方に住む子どもたちにとって、地域やまちづくりと関わる機会は大変貴重なものでした。時代は進み、ライフスタイルも変化する中、企業や団体も存続するだけで大変な時代に子ども劇場はどうして存在しているのでしょうか。その答えの一つは地域社会と子どもをつなぐという、時代が変わっても変えてはいけない大きな目的をもってしている事が挙げられるのではないのでしょうか。創設当初と比べれば、市民や子どものニーズ、社会情勢は大きく変わったかもしれません。しかし、地域と子どもの関わりを重要視しているこの団体は、その運営方法や手段を時代に合わせ変化させ、時々のニーズに応えつつも、大きな目的は変えずにここまでできたのです。変えてはならないものを守るために、より良く変わる柔軟性と信念、正に不易流行そのものです。

最後に、先述した事業に関わった仲間の数名は地元に残り、地域の青年団体への所属や仕事を継いで地域を支えています。斯く言う私も地元への想いが募り市政に関わる仕事をするようになりました。地域と子どもの関わりを創出する子ども劇場の影響は少なくありません。これまでもこれからも不易流行の精神で、多くの人により良い影響を与えて続けてほしいと思います。OBの一人として今後もその活動を応援したいと思います。

